超人探偵

小林信彦

新潮社

超人探偵

小林信彦

新潮社

超人探偵

定価　八三〇円

発行　昭和五十六年三月十五日
三刷　昭和五十六年四月二十五日
著者　小林信彦（こばやしのぶひこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
電話　業務部03（266）五一一一　編集部（266）五四一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

©1981 Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第〇話　ブルー・トレイン綺譚　5
第一話　帰ってきた男　27
第二話　悪魔が来りて法螺を吹く　57
第三話　神野推理氏の推理休暇　89
第四話　きみとともに島で　121
第五話　大阪で起った奇妙な出来事　151
第六話　クアラルンプールの密室　181
第七話　ヨコハマ1958　211
第八話　ボガートになりたかった男　241
あとがき　272

装幀　平野甲賀＋小林泰彦

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

超人探偵

第〇話　ブルー・トレイン綺譚

1

昼過ぎに出社すると、部下は食事に出ているらしく、私のデスクの近くには人影がなかった。
私は廊下に出て、自動お茶くみ器（というのかね、あれは？）のお茶を紙コップに受けた。
私、星川夏彦。としは三十代後半。ジャパン・テレビのチーフ・プロデューサー。
席に戻ると、デスクの上の数葉のメッセージに眼を通し、郵便物の山に手をのばした。
「星川さん……」
アルバイトの学生が遠くから声をかけてきた。
「ブルー・トレインの資料、ひとそろい、あるのですが、ごらんになりますか」
私が担当している幾つかの番組の一つで、日本のブルー・トレインの特集をやるのだ。
「いちおう、みておこうか」
と私は答えた。
「それにしても、ひとりぐらい、席にいてくれないと、仕様がねえなあ。あちこちの電話が鳴りっぱなしだ。餓鬼じゃあるめえし、メシ食うのまで、お手々つないでかね」
「いまの三十ぐらいの人って、そうですよ」

青年はにこにこしながら、大きな紙袋を私のデスクに置いた。
「きみたちは、ちがうのか」
と私はたずねた。
「苦労してますよ。石油ショック以後の世代ですから」
「そうも見えないがねえ」
「大苦労。なんとかこの会社に就職したいと思って、日夜働いているのですから」
「なるほど、それで、きみは、メシを食いに行かないのか。働いていることを印象づけようとして……」
「まあ、そんなところでしょうか……」
「よし。じゃ、電話を片っぱしからとってくれ。適当に返事をしとくんだ」
「はーい……」
うんざりしたニュアンスをこめて答えると、青年は、デスクの間をとびまわり始めた。
私は紙袋の中から大判のグラビア雑誌二冊をとり出した。
表紙にいわく――
〈夜行列車――星影の旅情〉
〈青い流れ星――ブルー・トレイン〉
やってくれるじゃないの、という感じである。
恋に疲れた女が行くのは、京都大原三千院だけではない。女のさがを背負った人妻が旅に出るのは金沢だけではない。わがブルー・トレインが待っている。地中海ぞいに走る本物には及びもつかないが、とにかく、〈銀河を渡る旅〉とか〈光芒は夜を駈けて〉とか、いいキャッチフレーズがならんでいる。SLなきあと、赤字国鉄の希望の星ではないか。
（そういえば、あのときも浅墓な女子大生どもが乗っていたっけな……）

私は煙草をくわえ、火をつけた。
そう――私も、たった一度ではあるが、このブルー・トレインとやらに乗ったことがあったのだ。あの神野推理といっしょに……。

中学いらいの親友だったわが友、神野推理が香港で行方不明になってから、一年五カ月になる。
（どうしてそうなったかは、『神野推理氏の華麗な冒険』という本に、くわしく書いてある。）
さまざまな事情で、公表できなかった事件も幾つかある。神野の母親が悲嘆にくれ、香港での事件の記憶がいまだに関係者にはなまなましいので、それらの発表を私は控えてきたのだ。
（ブルー・トレインか。あれも変な事件だったな……）
私はけむりをゆっくり吐き出しながら眼を細めた。

2

一昨年の秋だったと記憶する。神野推理と私は東京駅のプラットホームを歩いていた。西鹿児島までゆくブルー・トレイン〈はやぶさ〉に乗るためである。
「大阪までブルー・トレインに乗ってみないか」
と言い出したのは、珍しくも、彼の方だった。
「毎度、飛行機か新幹線てのも、曲がないじゃないか……」
テレビのショウ番組の台本作家である神野と私は、当時、西下することがよくあった。
「どうせなら、個室にしようや。アイデアを考えるのに、いいんじゃないか」
時刻表を調べてみると、十六時四十五分に東京駅を発つ〈はやぶさ〉に個室寝台があった。これだと大阪着は、零時八分。夜中の一時まえには、大阪市内のホテルにチェック・インできるわ

けだ。
「大阪まで七時間以上かかるのか……」
愛用のパイプをくわえた神野は、ホームの時計を見上げて、はや、うんざりの体(てい)である。
私たちが乗り込んだのは発車まぎわであった。
個室A寝台があるのは1号車。肥った専務車掌に迎えられて、新幹線とは、だいぶ、気分がちがうと思った。
足を踏み入れた鼻先が〈乗務員室〉、それから廊下にそって、手前から14、13……と個室がならぶ。
「なんとも不思議なものだね」
神野はぼんやりと感想を述べた。
神野は11、私は10というルーム・ナンバーである。
ひとまず、おのおのの部屋に入った。
日本の列車の個室寝台は狭いという批判が多い。まるでビジネス・ホテルのようにあじけないという声もある。しかし、私は、まあまあではないかと思った。車窓に向って片側にソファがある。三人ぐらいはかけられるソファだ。正確には、ソファベッドというべきだろう。そこに腰をおろして見まわすと、廊下からの入口ドアの上に荷物をのせる場所があるのに気づいた。私はアタッシェ・ケースをそこにのせた。
車窓ぎわに、小型のライティング・テーブルのようなものがある。ふたをあけると、水と湯が出る洗面台だった。ついでに、私は手を洗ってみた。
次に、廊下側のドアに鍵をかけ、カーテンをしめて、ソファに横になってみた。外部と隔絶した安心感はたしかにある。
右手をのばして、枕元の螢光スタンドを点けた。それから、室内の温度が低過ぎるように感じ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

たので、壁の温度計を見た。
針が二〇度を示していた。これでは風邪をひいてしまう。私は冷房のスイッチをさがして、つまみをひねり、切ってしまった。(ついでにいえば、頭の上の壁には、ほかに室内灯、床灯、暖房、警報のスイッチがあった。)
次に、車窓の側の二重カーテンをしめてみた。部屋の中は夜中と同じになる。ただし、螢光スタンドの灯は、文庫本が読める程度には明るい。
がたん、と音がして、列車が動き出した。
揺れ具合は、かなり、ひどい。これで九州まで行ったら、身体がばらばらになりそうだ。
ノックの音がした。
かなり堅牢なひねり錠をまわし、ドアをあけると、細い黒の蝶ネクタイをしたさっきの車掌が立っていた。検札にきたのだ。
車掌が立ち去ると、神野推理が入ってきた。
「もう眠るつもりか?」
「いろいろ、ためしてるんだ」
と私は答え、窓のカーテンをあけた。
「初めてのものというのは、いろいろ、興味がある……」
戸口にもたれたまま、神野は超然と言った。
「ぼくは、この車輛の中を、いちおう、歩いてみたがね」
「もう!」
私は驚いた。
「きみも見た通り、個室は全部で十四ある。十三でなくて、幸いだ。……それから、この廊下の突き当り——つまり、機関車に近いところに、手洗いと物置きがある……」

その時、食堂があいたという女性の声のアナウンスが鳴り響いた。
「腹がへった。忙しくて、昼めしを食べてなかったんだ」
と私は言った。
「つき合うよ」
神野はにやりと笑った。
「食堂車は8号車だと言ってたぜ」
「そりゃ、大変だ」
私は呟いた。横揺れがはげしいからである。
1号車の〈乗務員室〉の脇を通って、2号車に入る。右側に大きな洗面台、左側に手洗いが二つある。これは、当然、2号車のもので、二段式B寝台というやつらしい。それにしても、こんなに乗客がいないのでは、国鉄の赤字もあたりまえと思われた。
「あいたっ！」
私は壁にひざをぶつけて叫んだ。

食堂車に入った私は、席をえらぶために、しばし、立っていた。
大きな身体、縞の背広に赤いネクタイ、黒ズボンの足をひろげる形で、小さな椅子に、すわりにくそうにしている男。テーブルをはさんで、相手のグラスにビールを注いでいる痩せた男。
どうみても、ヤーサン（やくざ）である。それも、関西人らしいと派手な服装から察した。
「向うがいい」
神野は、二人組から離れた、反対側のテーブルに向って歩いた。
「ヤバいな」
私たちは、さりげなく、テーブルについた。

「ビールだ……」
と注文してから、私は、小声で、
「夜行列車には多いんだ、ああいう連中が。旅（地方興行）の多い歌手が、よく、そう言うぜ」
「あの大男が何者か知らないのか？」
神野は私の眼を見つめる。
「京都の三輪組の組長だよ」
「え？……」
「三輪登さ、いま評判の」
「関西一の勢力を誇る須磨組に対して、公然と戦いを宣言したあの組かい」
「ああ」
ビールがきた。
メニューをみて、関門定食というのを注文してから、私たちは乾杯した。
「いよいよ、ヤバいなあ。週刊誌で読んだところだと、須磨組系の暴力団全部が、三輪登の首をとるとハッスルしてるそうじゃないか」
「そうだよ」と神野は悪戯っぽく笑って、「だから、彼はこの列車に乗っているのだ」
「どうして？　自動車の方が安全じゃないかね？」
「自動車や飛行機や新幹線よりも、命を守り易いのが、われわれのいる個室A寝台さ。あの中に閉じこもっていれば、襲われる機会は、まず、ない」
「あ、そうか」
私は頑丈なドアと鍵を想い浮べた。
「彼の個室は、きみのとなりだ。まちがって、殺し屋に襲われぬように注意したまえ」
神野は嗜虐的な笑みをたたえた。

「おい、本当かい？」
「本当だとも」
神野は紙ナプキンをひろげると、「揺れるんで、書きづらい」とコボしながら、ボールペンで、1号車の部屋割りを書いてみせた。
乗務員室
14
13 アンノン族風の女子大生
12 子づれの三十ぐらいの女
11 神野推理
10 星川夏彦
9 三輪登
8 キャリアガール風の孤独づくりの女
以下略——
「……というわけだ。発車するまえに、なんとなく目についたのさ」
「さすが……」
私はビールを注いでやって、
「つまり、東京駅までのボディガードと、京都駅からのボディガードを、しっかりやっておけばいいわけだな」
「そういうことさ」
神野は窓の外を眺めて、
「横浜までは、どう仕様もないな、景色が……」
「おかしいぜ」

と私は首をひねった。
「三輪は、なぜ、部屋に閉じこもっていないんだい？」
「考えてみろよ」
神野はパイプをくわえて、
「われわれだって、あの狭さに馴れるのに、時間がかかるだろ？　フランスの青列車や、スペインの〈バルセロナ・タルゴ〉とちがって、団地サイズの個室だ。三輪の巨体が、やすやすとおさまるものか」
「なるほど……」
私は頷いた。まことにワトソン役にふさわしい鈍感さであった。
「しかし、隙がない」
神野は二人に視線を走らせて、
「もう一人の痩せた男は空手をやっている身体つきだ。車内用ボディガードだな」
その時、ポロシャツに黒の上下という、がっしりした身体の男が、食堂車に入ってきた。三輪たちに気づくと、驚きの色が顔を走った。
男はためらったあと、二人から離れたテーブルについた。
「妙な男がきた。あっちの方の人間だ」
「やくざかい」
ふりかえることができぬ神野は、低い声で、たずねた。
「ああ」
「やれやれ」
神野はビールを一息で飲んだ。

3

横浜からの乗客は殆どないようであった。

そこを発車すると、十九時十五分に静岡に着くまで、どこにも停車しない。その間、約二時間ある。

「のんびり、いこうや」

名前だけがすばらしく、内容はいっこうにすばらしくない関門定食とやらを食べ終ると、神野推理は、女の子にお茶を注いでくれと声をかけた。

「旧東海道線のとりえは、海が見えることだなあ」

食堂車にいたのは三輪組の二人。それから、なんとも知れぬやくざ風の男。私たち。それに、横浜を過ぎてから入ってきた初老の男だった。

初老の男はエビフライで日本酒を飲んでいたが、わりに早く、席を立った。

なんとも知れぬ男は、黙々とウイスキーを呷っている。

ブルー・トレインは揺れ過ぎるという苦情が多いらしいが、食堂車だと、かえって胃の消化を助ける気がする。私の感じ方では、大磯あたりで揺れがすくなくなったようだが、それでも、時々、がたん、とくる。

「日が暮れてきた……」

花鳥風月に興味がない神野は、夕闇に包まれ始めた海に眼をやりながら呟いた。

「どこだい、いま?」

「湯河原だ」

と私は答える。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co